

## “『観』をつなぐ”

### ～ 幼保小連携と生活科を考える～

辰野東小では、低学年を中心に学校近くの『ゆめやま』で、木や斜面や見つけたものを使って思い思いの遊びを行っています。2年生の子どもたちも昨年度から足繁く通い、心ゆくまで遊んできました。今年度はその2年生と、本校に来年度から通う東部保育園の年長さんが『ゆめやま』で一緒に遊ぶ時間を大切に続けてきました。そのひとこまでです。

Mさん(年長児)は、Rさん(2年生)と手をつなぎ、渡された棒を持って坂道を上り下りしていた。しかし急な坂の上りにさしかかると、自分の手をつかざるを得なくなり棒をおいて両手にしっかり力を入れて上るようになった。そして足下もしっかり踏みしめるようになってきた。

下り坂では、Rさんが足の裏をしっかりとつけているのに比べて、足先で細かく歩を進める感じのMさんであったが、Rさんが走って下る姿を何度も見て自らも少しずつ歩幅を広げてスピードを上げ、後半にはRさんよりも先に下りて行く姿があった。先に下りたMさんは、「早く！」とRさんに声がけをしていた。  
(辰野東小幼年教育研究部会 授業記録より)

『ゆめやま』での時間は、2年生と園児がともに自然の中で十分遊びこむことが保障されており、ゆめやまの様々な自然の状況に何度も挑むことができます。言い換えれば“壁を乗り越える”体験ができるのです。Mさんに限らず、園児は2年生というモデルが身近にいることもあり、『ゆめやま』の状況に応じる体になっていく学びが見られました。



さて、“幼保小の連携”という言葉をよく耳にします。それは、“抵抗感を減らしスムーズな学校生活への適応”といった意識と共にあったりします。とすれば、『ゆめやま』で坂に挑むMさんにRさんは常に優しく手を貸すような世話が義務づけられる活動がよしとされるわけです。もし、そうだとしたらMさんが“壁を乗り越える”姿は皆無になってしまうでしょう。それは、Mさん自身の持っている力が表出される機会を奪ってしまうことに他なりません。大げさに言えば“生きる力を奪う”ということになるのでしょうか…。

『生活科指導書①総説(P14)』には、次のように書かれています。

わたしたち教師は、子どもが見せる様々な姿を「よさや可能性」としてとらえ、子どもの「自ら育っていこうとする」力が存分に発揮されるような状況づくりをしていくことが大切です。近年「幼保小連携」の必要性が声高に叫ばれるようになっていますが、この時期における子どもを取り巻く幼保小の先生たちで、こういった「子ども観」「支援観」などを共有していくことが、「子どもの育ちをつなぐ」という意味で、「幼保小連携」の核心と言えるのではないのでしょうか。

『ゆめやま』でMさんが“壁を乗り越える”力が引き出され発揮できたこと、その姿の背景には、小学校と保育園の先生方が子どもの姿や育ちについて幾度となく語り合っていくことで、“『観』の共有”が少しずつ築かれていったいきさつがあります。「子どもの育ちをつなぐ」ための「幼保小連携」は、“『観』をつなぐ”ことで実現されていくのではないのでしょうか。

★今年度も『レッツビギン』をお読みいただきありがとうございました。(委員一同)